と見えしに同意なり、又少選をよめり、

〔日本書紀神代一〕素戔嗚尊請曰、吾今奉敕、將就根國、故欲暫向高天原、與姉相見而後永退矣、

〔日本書紀神代二〕一書曰○中略弟往海濱、低徊愁吟、時有川鴈、嬰網困厄、卽起憐心、解而放去、須臾有鹽土老翁、

〔日本書紀景行七〕二十七年十二月、川上梟帥叩頭曰、且待之、吾有所言、

〔萬葉集相聞十三〕反歌○長歌略

數數丹、不思人者、雖有、暫文、吾者忘枝沼鴨、

〔書言字考節用集時候二〕暫時　節間萬葉　束間同事見鹽

〔倭訓栞都前編十六〕つかのま　喜撰式に、若詠時時つかのまといふと見ゆ、時の間也、つかは時と通ず、又萬葉集に束間とありて、一握の間にて暫時をいふともいへり、夏野行牡鹿の角のつかの間といへるは、角落てまた手一束ほどに生出たるをいふ也、

〔萬葉集相聞四〕柿本朝臣人麻呂歌三首

夏野去、小牡鹿之角乃、束間毛、妹之心乎、忘而念哉、

〔書言字考節用集時候二〕時計俗字　須臾同

〔倭訓栞前編十八登〕とばかり　詞にいふは、それとばかりの義也、とばかり見つる、とばかりやすむなどは、をばしの意なりといへり、細流に時ばかりの義とも見ゆ、

〔源氏物語二帚木〕この男いたくすゞろぎて、門ちかきらうのすのこだつものに、をりかけて、とばかり月をみる、

〔書言字考節用集時候二〕暫時日本紀用玲瓏字

〔倭訓栞前編十四多〕たまゆら　玉ゆらに昨日の夕べ見し物をなどいへるは、たまさかの意也と、公